

目次

権利	Copyrights United Nations University
シリーズタイトル	国連大学プロジェクト[日本の経験]シリーズ
雑誌名	技術と産業公害
発行年	1985
URL	http://hdl.handle.net/2344/00051126

目 次

序 文 (林 武) . . iii

総 論： 公害原論 (宇井 純) . . 3

I はじめに 3

II 公害激化の原因 3

III 不法行為としての公害 7

IV 公害の長い歴史と経験 9

V 本書の構成 12

総合年表

第 1 章 足尾銅山鉍毒事件

——公害の原点—— . . . (東海林吉郎・菅井益郎) . . 15

I 足尾銅山の技術近代化と発展 15

II 鉍毒反対闘争と藩閥政府の対応 19

III 日清戦後経営の基本的要請 26

IV 田中正造の直訴と遊水池計画 30

V 田中正造の谷中村入り 36

VI 足尾銅山鉍毒事件の歴史的位罫 37

(1) 銅山の公害 37

(2) 鉍毒事件の政治経済的背景 39

(3) 鉍毒事件の影響	41
VII 鉍毒問題のその後の展開	49
(1) 鉍毒問題の治水問題への転換	49
(2) 鉍毒問題の再燃	51
むすび： 足尾銅山鉍毒事件の今日的意義	55
第2章 戦後日本の公害 (星野芳郎)	57
I 戦後日本の公害の歴史的背景——歴史上前例なき高度経済 成長——	57
II 戦後日本の公害の特徴——見える公害から見えない 公害へ——	61
III 公害に対する住民と行政の対応	67
第3章 砒素ミルク中毒事件 (東海林吉郎・菅井益郎)	71
はじめに	71
I 消費構造に組みこまれた授乳	71
II 調整粉乳の生産拡大と森永乳業	76
III 砒素ミルク中毒事件と森永乳業の対応	80
(1) 奇病発生から砒素検出まで	80
(2) 被災者闘争の組織化と発展	80
(3) 乳業資本と五人委員会	81
(4) 「守る会」の結成	82
IV 「14年目の訪問」——丸山報告——	83
V 被害者救済運動の拡大	87
VI ひかり協会の設立	90
(1) ひかり協会の事業	90
(2) 残された課題	92

第4章 水俣病 (宇井 純)	97
はじめに	97
I 日本窒素肥料の出発	98
II カーバイト有機化学工業への進出	99
III 敗戦と壊滅的打撃からの立直り	102
IV 水俣病の発見, 原因究明の困難	103
V 社会不安と漁民暴動	105
VI 中和と忘却	106
VII 新潟での再発	108
VIII 政府見解と再交渉, 調停	109
IX 水俣の提訴と市民の支援	110
X 水俣病の間直し	112
XI 本社交渉, 座りこみ	114
XII 第三水俣病と行政側の反撃	115
XIII 被害者運動と再生の努力	118
むすび	121
第5章 三池炭塵爆発事件 . . . (星野芳郎・飯島伸子)	123
I エネルギー転換と労働者	123
II 炭鉱の近代化と労働者	126
III 炭鉱での最悪の事故——炭塵爆発——	129
IV 1963(昭和38)年11月9日, 三池炭鉱爆発す	130
V 有毒「跡ガス」をめぐる問題	132
VI 無かったに等しい救護態勢	134
VII 初期治療における致命的過誤	137
VIII 一酸化炭素中毒とは	139
IX はかり知れない人権侵害	141
X 損害賠償請求訴訟の提起	144

第6章 被害の社会的構造 (飯島伸子)	147
I 被害把握は何故必要か	147
II 被害構造のイメージ	148
(1) 四つの被害レベル	149
(2) 被害度を規定する社会的要因	151
III 生命・健康の破壊——被害認識をめぐる問題点——	155
IV 生活構造の破壊	157
(1) 死者の発生と生活への影響	158
(2) 健康障害と生活への影響	159
V 人格上の変貌	162
VI 被害構造を打破する力	163
(1) 極度の被害のはざまから	163
(2) 大衆運動との連携	165
(3) ユニークな事例——高知パルプ事件——	166
結 論 (宇井 純)	173
I 基本的人権	173
II 企業と政府の役割	174
III 裁判の問題	176
IV 科学技術の役割	177
V メディアの効果	179
VI 日本の未来	180